

令和6年度 キャリア・プランニング講座 第2回社会人講話

令和6年9月26日(木) ⑥⑦校時のLHRに、多様な経験や専門領域の調査・研究をされている実践家の活動に関する講話を聞いて、自己の探究課題の設定や調査・研究、自己の進路決定の参考にすることを目的に講座を開催しました。講師・担当生徒・講座の内容と生徒の感想を掲載します。※敬称略

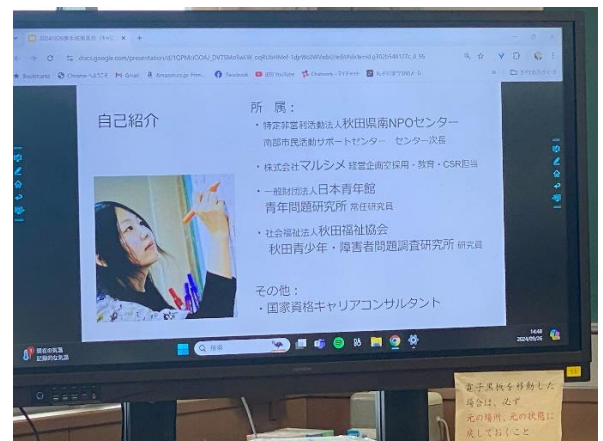
講師：岡部 克憲 (看護師、看護学生実習担当)

今日の講座を聞いて自分のこれからの人生についての選択肢の幅が広がったと思います。私はまだこの職業につきたいとはっきり決まっていますが、医療の仕事に就きたいと考えています。精神科にも興味があったので話を聞くことができ良かったです。「夢は何回だって変わってもいい」や「何事にもチャレンジしてみよう」などといった言葉がすごく心に残りました。やってみないと分からないことがあるし、やったから得た経験も財産になると改めて思いました。医療関係の仕事につくと常に勉強する姿勢が求められると思うので今も頑張る必要があるし、もちろんこれからも頑張って自分の人生をよりよい人生にしていければいいなと思いました。



講師：奥 ちひろ (NPO 法人秋田県南 NPO センター、キャリアコンサルタント)

この講話を聞いてパラレルキャリアというものを知って、それをすることで自分にあった職業を見つけたり、知ったりすることができること知り、自分も将来やってみたいと思いました。また、キャリアを考えるためのヒントとして、自分がどういうときにそのように感じたか、どんなときそのように感じたか、それによって何を学んだか、などを考えることが大事ということを知ったので、時間があるときに考えてみたいと思いました。NPO のことについても知りました。20の分野があり、それらは国に決められているということがわかりました。秋田に若者会議というものもあるということがわかりました。それによって、いいことがあるということがわかったので自分も参加したいと思いました。



講師：菊地 綾乃（青年海外協力隊OV（バナン））

今回の講話はアフリカのお話で、アフリカは日本と比べて比較的貧しいのでたくさんの驚きがありました。日本は電気で動いている機械がたくさんあり、生活が便利ですが、アフリカはそのようなものが一切ないようです。しかしそのようなものがないからといってだめということではないらしいです。日本は災害などが起こると機械などが使えなくなりとても不便になります。そこでアフリカの人は電気がない生活に慣れているのでそのような面から生命力がすごいんだなと思いました。僕たちはこれから何が起きるかわからない中で、いろいろなことが起きます。そこで失敗を恐れず、常に心をオープンにしていることが大切だと学びました。自分たちと違うということも自分なりに理解をし、優しい心を持って過ごしたいなと思いました。



講師：京野 楽弥子（ルワンダ研究、ブラッドフォード大学院・湯沢ロイヤルホテル）

今回のキャリア・プランニング講座で京野さんと千葉さんのお話を聞いて、湯沢ロイヤルホテルのお話や、京野さんの海外でのお話や、千葉さんのキャップ野球やボランティアについてのお話を聞くことが出来てよかったです。地産地消やホテルの工夫について知ることができ、海外で学んだ平和についての学習について聞いて、理解を深めることができてよかったです。また、高校生のうちから、ボランティアに参加することの重要性についても聞くことができたので、これからボランティアに積極的に参加していきたいです。



講師：佐藤 泰幸 (Driftwood Factory 「我流慕」 代表、流木作家)

青年期では、自分の親の家業を継ぐと信じていたがために、その後大きな挫折を味わっていた事を知りました。自分は今後の進路に対してほぼ確実に決めてありましたが、「もしも」のときに対応できるように幅広い目を持って探したいです。また、東日本大震災やコロナウイルスのような危機的な状況下でも「諦めずに、乗り越える」を自分でも身に付けたいです。泰幸さんが過ごした時代は、まさに日本の産業の空洞化が進んだときだと思います。父が工場の中国進出により技術士として派遣、自分のガラス研磨の工場も下請けを中国で行うなど、日本産業の転換点を実際に体験したのではないかと思います。現在、少子高齢化や材料費高騰により日本の工場が減少、産業も衰退してきています。自分たちの生活も産業・モノづくりによって支えられています。これからの課題をどうやって乗り越えていくのか考えていきたいです。



講師：澤口 駿亮 (ヤマモ味噌醤油醸造元 事業部長)

ジェラートとキウイの発酵させたものは初めて食べた味でした。自分のやりたいことを探したり、それに向かって行動したりしてみるということは大事だと思いました。澤口さんは海外にも実際に行っていて行動力がとてもすごい方だと思いました。自分だったら19歳で海外に行くのはとても不安が多いと思うし、そもそもそういう事は考えられないと思います。家族や先生に決めてもらうとその時はとても便利だと思うけれど、後々に嫌なことがあったらそれを全部その決めた人のせいにしてしまうというのを忘れないように、これからの自分の進路を決めてきたいと思いました。



講師：白井 原太（「白井晟一建築研究所」、建築家）

昔からの技術の需要が低下している現代において多彩な方向からアレンジを加え生存させていくというのはとても重要なことで有ると感じた。「残す」というテーマにおいて現代の需要に答えた改変を加えることはとても重要なことであるが、その当時の需要を残さないとそれは「残したもの」としては輝かないと感じた。「今」と「昔」の需要をどのように調整して組み合わせるかが一番の難点であり、残した後輝けるかに影響してくる最も重要なことだった。白井さんが教えてくれた「不立文字」にはとても納得した。スマホひとつで情報を集められる現代社会において自分の目で見て感じるということは何よりも大切なことであり、周りに流されない己を保てる行動であると感じた。



講師：藤本 恵子（NPO 法人 バニヤツリー代表理事、バングラデシュ支援）

藤本さんのお話を聞いてバニヤツリーの活動内容や海外で活動することの大変さや、やりがいを知ることができました。私は海外での活動に少し興味をもっていたのでお話を聞くことができよかったです。奨学生を選ぶときに本を贈呈して読書感想文を書いてもらうのは良い取り組みだと思いました。しかし、校長先生に盗まれたことを知ったときすごく驚きました。日本だったらとても大変なことだと思うけど、今回のように、海外だからこそういことが起こり得ることを知って事情があるからしょうがないのかなとも思いました。けれど、こういう失敗があったからこそ今も活動をやっていると藤本さんがおっしゃっていて、私も失敗しても諦めず頑張りたいと思いました。話を進めている中で藤本さんが「自分だったらどうする？」と、たくさん問いを投げかけていて自分ごととして考えるという思考がとてもいいなと思いました。スライドで紹介していた「大切にしたいこと」を私も意識してみたいです。今回、私とはあまり関わりのないバングラディッシュについて知れたので良かったです。私も過程を大事にして物事に取り組みたいと思います。

